

## 10代子育て家庭への妊娠期からの福祉的支援に関する研究(3)

### —当事者参加型調査の可能性と課題—

○ 日本大学 上田 美香 (005950)

唐田 順子 (西武文理大学・007928) 森田 明美 (東洋大学・000646)

キーワード: 10代の母親、当事者参加型調査、子育て支援

#### 1. 研究目的

子どもの虐待や子育てで不安、ひとり親の急増にともない10代の母親の妊娠・出産・子育ての問題が顕在化している。しかし、10代の母親について妊娠期から子育て期に継続的に調査された研究が存在せず、実態把握が難しい状況にある。本研究は、10代の母親の妊娠・出産・子育ての実態把握と、それをふまえた10代子育て家庭への妊娠期からの継続的な福祉的支援システムの開発を目的としている。本報告では、当事者の参加が難しい調査を実施するために必要となる当事者参加型調査の可能性と課題について検討する。

#### 2. 研究の視点および方法

10代の母親の妊娠・出産・子育ての困難と支援課題を明らかにし、支援方法を開発するため、次の調査と実践の分析を行った。本調査研究の実施に際しては、障がい者福祉や保健福祉分野などで取り組まれて来た当事者参加型調査を参考にし、少数で発言の機会が少ない生活課題を抱える人たちに対して、エンパワメント過程を経て研究の新しい地平を切り開く方法を探るものである。当事者としては、オンラインおよびオフラインで交流を深めている10代の母親グループに対して本研究の協力を依頼し、2か月に1度の日曜日、4か月～5歳の子どもを連れて集まってくるメンバーに大学内の1フロアをオフ会の会場に提供した。年齢にふさわしいおもちゃや昼食を用意し、同じ空間で保育士による保育を保障し、母親が交流する時間と場を提供すると同時に、子育ての状況のインタビューや親子関係の観察、支援の試行および意見交換を行った。

#### 3. 倫理的配慮

学内の倫理委員会の審査を受け承認を得ている。詳細は発表時に提示する。

#### 4. 研究結果

私たちは、2009年・2011年度学会で、10代の母親の調査方法の開発および継続的なインタビュー調査で明らかになった妊娠・出産・産後約2年の10代の母親の実態、さらに、それをふまえて試行している10代の母親グループ活動の実践から支援課題を報告した。

10代の母親グループのオフ会は、親子が安心できる環境を整備し、同じ空間で保育士も関わりながら子どもを遊ばせたり、昼食をとりながらの寛いだ雰囲気の中で行われている。2年余り開催することで、継続的に同じ研究者(大学教員、保育士、助産師)が子育てや家族の悩みに寄り添いながら、母親たちが仲間と安心しておしゃべりを楽しむ居場所になっている。片道2時間以上かけて参加する10代の母親もいる。

こうした継続的な当事者と研究者が一体となったグループ活動とその調査（2010年3月から2012年6月までに16回実施）からは、当事者参加型の調査の意義と課題について次のようなことが明らかになった。

①継続的な支援を行いながら実施する調査によって、妊娠・出産・子育ての時期に女性が遭遇する課題である自己実現と妻・母・嫁役割、子どもの成長発達、双方の実家からの独立、就職や転職、保育園入所や子どもを預けること、夫や親族との関係調整、第2子の妊娠や子育てなど日常的な状況の変化がどのように関連して発生しているのかということについて、10代の母親の固有性として把握することができた。②当初、研究者側から近況を尋ねる形で行ってきたインタビューは、10代の母親の側からの報告や相談という形に変化している。先行研究が少なく、構造化しにくい対象者である集団について、生活支援をすすめるための生活理解の機会に変化させることができるようになった。研究者と10代の母親の関係性の深まりが、相互理解と信頼につながり、生活や子育て問題の把握や支援の方法の開発につながったと考えられる。③新しいメンバーが加わりながら集団としても安定し、親子が育ち合う場所、支え合う場所になっていく当事者グループの展開過程として観察することができた。④調査活動であることから、自分たちだけや好きな人だけの集団だけでなく、社会的な交渉や役割を要請される。10代の母親たちが相談して活動の内容や流れを決めたり、市民団体との交流活動に参加したりすることにより、調査への協力という形から主体的な活動へと変化の兆しがみられる。⑤行政支援や地域の子育て支援の利用状況や感想をグループの中で議論することで、自分たちの抱える固有な条件に気づき、子育て支援の新たな課題について考え、語る力を得ている。⑥他の10代の母親研究チームの調査に対して、調査方法や項目に当事者側としての意見を述べるなど、当初はまったく興味を示さなかった地域支援や研究開発について興味を示すようになっていく。

このように調査への協力という形で、研究者と協同で10代の母親グループのオフ会が開催されることにより、調査から得られる内容や結果の変化と共に、研究者と10代の母親自身の変容も見られるようになっていく（詳細は当日配布資料をする）。

## 5. 考察

こうして2年余り実施してきた調査が、結果として、市民的な発言力を持ち得ない社会福祉課題をもつ対象者に対して、当事者たちの生活の相談に乗り、グループ活動をも支援をしながら、当事者たちが抱える問題の解決方法を一緒に探り社会福祉的な解決策を探っていく支援型の調査となっていることがわかってきた。こうした調査研究の中で、当事者としてグループすら組めなかった社会福祉の援助を必要としている人たちへの有効な支援方法を、どうしたら一緒につくりだしていくことができるか、今後の課題としたい。

\*本研究は、平成24年～平成27年度科研基盤研究B（一般）「乳幼児を育てる10代母親への継続的重層的な地域支援開発—日韓の質的縦断調査を中心に—」（研究代表者：森田明美）によるものである。